

2026年9月11日（金）

老球の細道940号

書いて、書いて、かく

会津バスケットボール協会 室井 富仁

少年時代の座右の銘を思い出すと、野口英世、二宮尊徳、豊臣秀吉など歴史上の人物から学んだ「努力」「根性」「忍耐」などのごくありふれた言葉しかなかった。大学を卒業して教員になってからは、読書や出会いにも多様性が加わり、それと同時に琴線に触れる言葉に多く出会うようになった。その中でも今でも使う二つのスローガンなる言葉がある。

一つは「四つの『意』」。「熱意、誠意、創意、室意」私が20代の時にお世話になった東芝電気バスケット部 HC の小浦氏から教えていただいた。当時の日本経団連会長土光敏夫氏の言葉。最初は「三つの意」だったが、私の「室井」を付け足して忘れないようにした。もう一つは「青春の『五』かけ」である。「汗をかけ、恥をかけ、頭をかけ、夢をえがけ、そして書いて、書いて、かけ」。この言葉も30代前半の時に当時勤務していた原町高校の芸術鑑賞会で出会った秋田の劇団「わらび座」の団員に教えていただいた言葉である。始めは「汗をかけ、恥をかけ、頭をかけ」の「三かけ」であったのだが、これも私なりにアレンジして「五かけ」にして今でも人生の指針としている。

今回特に書きたかったのは「青春の五かけ」にある「書いて、書いて、かけ」。私は小学生の頃から字は下手だし、文章を書くのも苦手だった。夏休みや冬休みに提出させられる日記や読書感想文などの宿題は父親の手を借りないとできなかった。それが今ではこのような通信を下手くそな文章で、恥も外聞も考えずに書いている。いくら「恥をかけ」がモットーでも赤面のいたりである。

実は、苦手で大嫌いな文章を書くきっかけは高校時代に書いていた「バスケットボール日誌」がルーツにある。高校1年時にバスケットボールに目覚めてから、自分の進歩向上を確認するために1冊の大学ノートに書き始めた。内容はごくシンプルなもので、「練習内容」「うまくできたこと」「できなかったこと」「先生にほめられたこと」「明日の練習課題」そして「シューティングの記録」であった。

コーチになってからは「コーチング日誌」をつけた。1冊のノートにその日のメニューを書き、練習が終わると反省をその後に記した。チーム全体、個人個人と様々な内容を思うがままに書き記した。選手時代の「練習日誌」や「コーチング日誌」は、私やチームがうまくいっていない時に過去を振り返り、再度奮起するために多いに役立ったものである。今でも時々読むことがあるが、大学、Bリーグで活躍した上杉君の記述について読むと、選手は「ある日突然」大ブレイクすることが記録されている。コーチはあきらめてはいけない。

教員時代は「授業指導案」「クラス通信」などを事細かに書いていた。書かないと忘れてしまうので記憶に留めるため、書くことによって考えを整理するために多いに役立った。今は「がん闘病記と健康日記」、孫たちのバスケ日誌「スラムダンク」を書き続けている。いつまで書き続けられるか分からないが「エンディングノート」を書いた時が「爺・エンド」。